

<プログラム>

「鳥取県にゆかりのある文学」

日本海情報ビジネス専門学校長
鳥取県文化振興財団理事長 中永 廣樹氏



鳥取県に関わりのある文学というのは沢山あります。古事記や出雲国風土記の方に始まり色々ありますが、今日は近現代の文学に関わるお話をさせていただきます。

まず島崎藤村です。自然主義の文学で有名ですが、「山陰土産」という随筆を書いています。昭和2年に次男の鶏二と山陰本線で10日間あまり旅をしています。この様な文豪がこの本の中で、山陰はいいな、という感慨を持ち、風情を感じながら、来て良かったと思っています。

二番目は志賀直哉です。小説の神様と呼ばれた人です。「城崎にて」というのは高校の教科書にも載っていました。その著者の「暗夜行路」では、一番大事な場面に、大山が出てきます。主人公が大山に登る際、一人だけになり、だんだん夜が明けるにつれ人間不信に陥っていた主人公が、少しずつほぐれた気持ちになっていきます。筆者にとっては、大山以外にはこの締めくくりのシーンは無く、大山をここに持ってきた意味を私たちは大事にしていきたいと思います。

三番目は井上靖です。生前ノーベル賞の候補にもあがっていました。「天平の躰」や「敦煌」があります。「通夜の客」では、自らの戦争責任を感じていた主人公が山陰の山奥に引き籠り、一途な愛を寄せる女性と三年間、家族に知らせることなく暮らします。日南の風景や人々が美しく描かれており、昭和35年には五所平之助監督が映画化しております。

四番目は松本清張です。「砂の器」や「点と線」など名作が沢山あります。その中で「父系の指」は、筆者の実際の父のことを描きこんである私小説です。筆者の父が日南町の矢戸の出身であり、矢戸を出て一度も帰郷することがなかった父親との流転の貧しい生活の中で、成長する主人公が父の劣性の性格を受け継いでいると自覚する屈折した思いや、父方の血への嫌悪憎悪を、この作品を通して描いています。この本の中で、或るとき主人公が父の故郷の矢戸を訪ねています。松本清張らしい作品です。